

Face

Staffの横顔

うちやま まさやす
内山 正康 さん
海洋科学技術センター
経理部財務課 物品係長



事務用品から観測船まで センターの資産を数字で管理 研究者の成果を陰で支える

独立行政法人化へ向けて会計システムも改修 資産内容も整理して、新たな船出の準備を進める

横須賀本部をはじめ国内にいくつもの施設を持つ海洋科学技術センター。昨年オープンした地球シミュレータ関連施設がある横浜研究所、青森県むつ研究所などの研究施設はすべてセンターの固定資産だ。さらに、観測用船舶、潜水船等研究機器、研究によって得た知的財産なども含め、センターには有形無形のさまざまな資産がある。それらを管理するのが経理部財務課の仕事だ。来年の独立行政法人化によって、研究業務もさらに厳しい評価を受けることになる。研究の学術的な評価を、法人の決算書上の評価に置き換える財務課は独立行政法人化によって企業会計的な性格となり、さらに重要性を増す。会計検査と独立行政法人化に向けた準備でまさに業務のピークを迎えている経理部財務課に、この4月より配属された内山正康さんを訪ねた。

現場の経験を買われて経理部へ

「出身は横浜なので海洋科学技術センターは小さな時から知っていました。大学では水産学を学び、船上での観測も経験しました。今ここで働いているのも、やはり海洋に関する興味があるからこそです」という内山さん。仕事を通してセンターと関わることになるのは、今から7年前にさかのぼる。1996年、センターの船舶運航に係わる仕事だった。

「当時の仕事は船の運航管理です。各地の港や自治体との調整などをしていました。船の一般公開などでは現場に行つての業務も多く、大学での海洋観測実習も役に立ちましたよ」

その後、1998年には総務部総務課へ配属。細かい業務を通して各部署とのつながりも深まり、徐々にセンター全体の仕事も把握。そして3年後の2001年、異動した先が経理部だった。経理部というすぐに思い浮かべるのは簿記や会計の仕事だ。しかし、実際に数字を整えるまでに行われる業務は多岐にわたる。センターでは約35名の職員がそれを分担するが、内山さんの担当は監査係。会計検査などの調整や受付、物品購入の伝票審査などが主な仕事だ。こういう物品は必要か、旅費は適正かといった金銭の使途のチェック、会計検査における調整窓口として各部署に書類を手配するなど、言わば、経理の中の総務的な役割を受け持つ。

「実はその時点でいわゆる経理の知識は全くなかったんです(笑)。ただ、総務時代に様々な現場に足を運んでいましたから、各部署の担当者も知っているし、研究の概要や機材についても多少の知識はある。



総務部時代、一般公開された「みらい」での1コマ

結局、仕事がわからなければ、お金や物の管理はできません。場合によっては研究者の方々との調整も必要です。そういう意味で、総務課での経験が大いに役立ちました。少しは現場の立場になって考えることもできたかな、と思っています」

研究成果を裏で支える決算書

そして、この4月、異動となった財務課での内山さんの担当は、センターの財産管理が主な仕事。支払伝票の仕分け、資産登録、固定資産税の申告、決算書類の作成まで、すべてが守備範囲だ。設備などは使用目的に応じ耐用年数を出し、固定資産税を算定し、必要に応じて保険もかける。

「例えば、地球シミュレータの減価償却は4年。基本的に研究開発が目的の備品類は耐用年数4年です。船舶などはまた異なる耐用年数で15年となります。建造中の『ちきゅう』も17年の竣工が楽しみです。今までにない大きな財産になります。プレッシャーもありますが、その分やり甲斐もあります」

「ちきゅう」のような船舶は、船体から機械装置類のひとつまで仕分けをし、決算時に備え建造中の段階から準備を始める。そしてそれらを全て数字としてまとめたものが、決算書だ。財務課の9人でまとめていく。

「異動していきなり決算ですから、これは大変でした。参考書を片手に電卓をたたいて四苦八苦の毎日でした。仲間に助けてもらいながらなんとか終えましたが、こんなに勉強したのは受験の時以来ですよ」

加えてセンターは、来年度より独立行政法人となる。それに伴い、新しい会計基準に合わせた会計システムの改修も始まっている。財産管理の面でも、資産の内容まで監査法人のチェックが入るため整理が必要だ。そうした準備も内山さんの仕事だ。

「最初に決算を経験したお陰で会計システムも把握することができました。固定資産管理システムの改修は早期に解決しなくてはならない課題です」

独立行政法人は、中期計画の5年間でどのような研究をしてどんな結果を出すのか、

あらかじめ提出が求められ、その結果が評価される。長期的な研究でも、今後は中期計画に沿った成果や論文が必要となる。研究内容に関しては外部の委員会が評価を行うが、最終的にそれを費用対効果を踏まえて数字で把握するのは決算書、つまり財務課だ。

「経理はあまり表に出ない仕事ですが、最終的に世間が見るのは数字です。研究の評価が高くて、会計面できちんとしておかないと台無しにしてしまいますから」

資産管理を通じてセンターの歴史に触れる

財務課へ来てからは、それが自分に向いているのか不安に思ったこともあったそう。しかし「決算書を作り終えた後の達成感が何とも言えないんです」と内山さんは嬉しそう。また、様々な資産を調べるなかで、“センターの財産の歴史”に触れられることも、予想外の面白い作業だという。

「この建物は何のために作られたのか、現在はどういう目的で使われているのか、そういう由来は財産管理をする上で重要です。過去の経緯を知らないと正しい判断はできません」

特にセンターでは技術開発も研究の重要な使命のため、開発されたモノ自体が成果として残されることが多い。

「独立行政法人化に向けて資産の精査を年内に行わなければなりません。継承資産は評価の対象となります。センターの30年の歴史の中で開発された物はすべて貴重な財産ですが、永続的に保管する必要があるか厳しく判断することも求められます。展示物などに転用し歴史として残していく場合もあります」

「海の仕事や研究に携われることが自分の夢だった」と語る内山さん、現在の仕事には満足しているそう。職場の仲間とコミュニケーションを取りながら、センターが世界一の研究機関になれるよう、経理の仕事も愛情を持って取り組みたいという。独立行政法人化へ向け、引き続きハードな1年となりそう。